

## 武蔵野日曜講筵 復活節祈禱会

## 第三の旅人

――ルカ伝第24章13～31節――

1990年4月15日

小池辰雄

キリストが道連れになってくださる 詩の世界が即現実 永遠を生きている人

## 【ルカ24】

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、<sup>14</sup> 凡て有りし事どもを互に語りあう。<sup>15</sup> 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。<sup>16</sup> されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わ<sup>あた</sup>ず。<sup>17</sup> イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止<sup>とどま</sup>り、<sup>18</sup> その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓<sup>やど</sup>り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』<sup>19</sup> イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業<sup>わざ</sup>にも言<sup>ことば</sup>にも能力<sup>ちから</sup>ある預言者なりしに、<sup>20</sup> 祭司長ら及び我が司<sup>つかさど</sup>らは、死罪に定めんとて之を付<sup>わた</sup>し遂に十字架につけたり。<sup>21</sup> 我らはイスラエルを贖<sup>あがな</sup>うべき者は、この人なりと望みいたり、然<sup>しか</sup>のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、<sup>22</sup> なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝<sup>あさ</sup>風く墓に往きたるに、<sup>23</sup> 屍<sup>しかばね</sup>体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。<sup>24</sup> 我らの朋<sup>とも</sup>輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』<sup>25</sup> イエス言い給う『ああ愚<sup>おろか</sup>にして預言者たちの語りたる凡<sup>すべ</sup>てのことを信ずるに心鈍<sup>にぶ</sup>き者よ。<sup>26</sup> キリストは必ず此らの苦難<sup>くるしみ</sup>を受けて、其の栄光に入るべきならずや』<sup>27</sup> かくてモ―セ及び凡ての預言者をはじめ、己に就<sup>つ</sup>きて凡ての聖書に録<sup>しる</sup>したる所を説き示したもう。<sup>28</sup> 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、<sup>29</sup> 強<sup>し</sup>いて止めて言う『我らと共に留まれ、時<sup>ゆうべ</sup>夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃<sup>すなわ</sup>ち留らんとて入<sup>い</sup>りたもう。<sup>30</sup> 共に食事の席<sup>つ</sup>に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘<sup>さ</sup>きて与え給えば、<sup>31</sup> 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。



## ●キリストが道連れになつてくださる

もう皆さんがあまりにもよくご承知のルカ伝24章です。特にこの二人の旅人にキリストがついて来て、そして、問答を始める。そして、

「何事か？」

なんて、キリストはしばらくつづけて聞いている。おもしろいですね、

「何をお前たちは……？」

と。ところが、

「お前さんは聞いてないか」

なんて言つて問答している。そして今度は、キリストが本格的にしゃべりだした。あの「エマオ途上」の有名なキリストの絵がありますね。見えざるキリストだが、実はこの場合には旅人たちには見えているわけだ。そして、ちゃんと問答している。まあ、実に劇的なところですよ。だから、聖書は正にドラマなんですね。お説教ではない。何回読んでも、私たちはここを読んでいて、この旅人たちと同じように、心がうちに燃えるというわけです。

キリストは、

「火を投ぜんために、<sup>つるぎ</sup>剣を投ぜんためにやつて来た」

と、烈しいことを仰つた。いわゆる天剣です、人を活かす剣です。殺す剣ではない。また、本当に燃やす火であつて、消す火ではない。

私たちはそのように、どんなに独りで歩いていても――私は夜、詩を書いているんです。昼間はそれに関わる参考書を読んで、そして、夜は大体9時以後だね、ここは第三の旅人だが、正に私にとっては第二の旅人です。私は独り歩きだから――キリストがその道連れになつてくださる。あの召団讃美歌の第一番（「わが道連れ」）と同じです。正直、御霊のキリスト、あるいはキリストの御霊に導かれて、燃やされて書いています。

だから、そんなことを言つては少し大袈裟かもしれませんが、普通の詩人と違うんです。もともと、私は普通の詩人ではないんだから。正直、凄い文句が与えられます。始めっからずつと書いているわけではないですよ。ゲーテの『ファウスト』もいろいろなところから総合されるんですが、その時に閃きがくるその題材をとらえて書いている。私はゲーテみたいにドラマは書きません。けれども、ダンテの『神曲』式にドラマチックなエポス、叙事詩ということになるだろうと思います。大丈夫、書きます。もう、ちゃんと見当がつかしました。それは一万行くらいにはなります。

## ●詩の世界が即現実

書いているときは、本当に、何と言うかな、もう天的現実の中にいるね。だから、楽しくてしょうがない。こんなのは私は初めて経験している。ということは、歳も80を越えるよね、地上にもう未練がないわけだよな。全く、形容詞ではなくて、天的現実なんです。



詩の世界が即、現実なんです。しかも、永遠の現在において、現然たるものです。そんなことですから、これは出来上がるまではどなたにもお見せしませんけれども、楽しみにしてください。

「私はもうあと10年生きていません。どうしても死にます」

という人にはちよつと見せてもいいけれども（笑）。あまり残念がらしてはわるいから。

あなたの方にとつても、何をなさつても、結局は我々の人生は旅だからね。このエマオ途上のキリストのごとく、キリストが語らつてくださっている。エマオ途上のこの二人は、イエスを招いて食事して、イエスがパンを裂いたら、

「あつ、これはキリストだ」

と分かった。そしたら、「消えた」と書いてあるが、あなた方は始めから

「主さま！」

というわけで歩くわけだ。だから、夜道を歩いても、女のひとでもひとつも恐くないよ。キリストが護り給う。夜道を歩けとは言つてません。試してはいけないんだからね、キリストを。キリストを試したら、とんでもないことになる。已むを得ず夜道を歩くときには大丈夫だというのはなしです。それは、聖霊の権威というのは不思議なものですからね、本当に。それは光りを放つかもしれないよ。正直、私のある友人は、

「小池君は光つていた。びつくりしたよ」

とはつきり言いました。二度か三度聞いた。その人はクリスチャンでも何でもないんだよな。

### ●永遠を生きている人

そういうことでね、

「汝らは世の光なり」

という。

「はい、そうです。あなたが光つてくださいます」

ということ、何でも、

「はい、そうです」

と言つて受けとつていかななくてはダメです。

「そうでしょうか」

ではないんだよ。キリストの権威ある言葉はもう無条件に受けとつていく。そうすると、その世界に入るからね。キリストは共に歩いてくださっている。共にご飯を食べてくださる。お独りで食べてらっしゃる方もあるでしょう。キリストと一緒に食べているんだというわけです。キリストは同時に幾人とも一緒に食べられるんだから。一緒に歩けるんだから。御霊のキリストというのはそういうのだから。

「あつちと一緒に歩いていたら、こつちはダメじゃないか」



なんて、そんなのは普通の現実だ。そういうところと違うんだ、キリストの世界は。

どうぞ、頭で分かるような現実には本当の現実ではないですからね。皆さん、聖書のこの現実というのは本当に凄いよ、福音書と使徒行伝のこの現実。我々が同じ質の現実をとにかく体験していかなかったら、つまらないですよ。そうしたらもう楽しくてしょうがないです、正直。楽しくて、力がきて、行き詰まりを知らない。いろんなことにでつくわせば、相対的に行き詰まれば、逆に本当に行き詰まらなくなる。本当にこれは秘訣だよ。

### 「我一切の秘訣を得たり」

とパウロが言ったが、その通りです。時間が足りないの、へつたくれもない。大丈夫。そういうことで、まあ本当に、手品師よりか凄いことになる。ありがたい世界だね。それが本当に永遠を生きている人なんだ。永遠を生きている人。現在において本当に永遠をつかんでいる人。ひとつも儂くない。よく、聖書の中には、

### 「過ぎ行くものは……」

なんていうけれども、過ぎ行かないんです。過ぎ行っても、それが全部、現在化して力がある。まあ、私は不思議でしょうがないです、正直。

(参考)

### A1「わが道伴れ」

(1976年2月21日作、讃美歌527「わが喜びわが望み」の曲で)

#### 1 わが道伴れわが情け

わが旅路の主よ

なやみにも苦しみにも

わが力の主よ!

#### 2 わが道伴れわが情け

わが天路の主よ

山を越え 谷を渡り

偕に進みたもう!

#### 3 わが道伴れわが情け

世の救いの主よ

わが身をもわが魂をも

捧げつつ進まん!

#### 4 わが道伴れわが情け

旅路の峠を

幾たびも越えに越えん

あまか  
天翔ける日まで!

